



幼なじみ

「もういいよ」
そう言ってくるつと振ふり向いて
足早に遠ざかる君の後ろ姿
後ろで結んだ髪かみが
僕を責めるように揺ゆれている
またやっちゃつたどうしてだろう
困っているからカを貸してほしいと
せっかく頼たつてくれたのに
他の誰たれかじゃなくて僕を頼たつてくれたのに
「そんなの無理だよ 関係ないし」
そんな言葉
いったい僕のどこから出てきたのだろう
きっつと僕じゃない僕が
僕の口に勝手にそんな言葉を話させたんだ
でも
いくらい言い訳しても
もう君の背中は見えない



どうしてこうなっちゃうんだろう
いつからこうなっちゃったんだろう
次の日になっても まだ 僕は考えている

なのに君は
なんにもなかったかのように 友達と笑っている
なんだよ、こっちはこんなに気にしているのに
なんだよ、昨日は あんなに困った顔をしていたくせに
僕の中に また 僕じゃない僕が顔を出す

「昨日 変な相談しちゃってごめんね もう大丈夫だから」
廊下ですれ違いがま 君は笑顔で僕に言う
全然大丈夫じゃないことも 全然本当の笑顔じゃないことも
すぐに分かった
もう何年のつき合いになると思っているんだよ

「あのさ」
振り返った君の顔を まっすぐに見る
「ちゃんと話 聞くとよ」
「本当に? ……ありがとう じゃあ あとで」
小走りの背中が 見えなくなった

今僕は
僕じゃない僕
ではなくて
君の 幼なじみ

うらはら

「本当に男同士みたいで楽だよ 気を遣わなくていいし」
 そう言って爽やかに笑う顔

ラク……？ キヲツカワナクテイイ……？

ああ まただ

「そうだよね」

そう言って笑い返す私

今 笑った顔 引きつってなかったかな

「——さんって かわいいと思わない？」

「うん 本当にかわいいよね」

ああ まただ

「——さんって 誰か好きな人いるのかな？」

「さあ そういう話は聞いたことないけど」

ああ まただ

そして このあと とどめが来る

「本当に 委員長にはなんでも話せちゃうんだよな」

ほら 来た やっぱり

「そうだよね」

爽やかな笑顔のその君 君は気づいていますか

君は私に なんでも話せちゃうかもしれないけれど

私は君に 本当に話したいことを ひとつも話せていないのです

いつも冗談ばかり言っているその君 君は気づいていますか

気を遣わなくていいから楽だと 君は言うけれど

気を遣って気を遣って苦しくて 私はときどき 泣きそうになるのです

詩 二編

クラスの中でも人氣者のその君 君は気づいていますか
私の名前は 「委員長」 ではないのです

ひとつも話せていないのに 私は君と 大声で話し
泣きそうになるのに 私は君と 大声で笑う

そして ときどき 委員長として
「ちょっと ちゃんと仕事しなさいよ」
なんて 君に言ったりも する

まあ そんなのもいいよなって 思ってた
まあ そんなのもありだよなって 思ってた

思ってたのに
ある日 突然 とらぜん 涙が なみだ こぼれた

「どうした？ 何かあったのか？ 話してみろよ」

(話せないから泣いてるんだよ)

「相談に乗るくらいしかできないかもしれないかもしれないけど」
(一番 相談できない相手なんだよ)

おろおろ おたおた しているその君

その姿がおかしくしておかしくて 私はくすくす笑いだす
わけが分からず きょとんとしているその君

その顔がおかしくしておかしくて 私はげらげら笑いだす
私は 泣きながら笑って 私は 笑いながら泣いた

そうやって ひとしきり泣いて ひとしきり笑ったら
なんだか 洗い流したように すっきりした

夕焼けが 窓の外を 金色に染めている

